

医療被ばくとは？

放射線科技師長 高谷英明

被ばくとは、放射線や放射性物質にさらされることをいい、放射線防護の観点から、医療被ばく・職業被ばく・公衆被ばくに分類されます。今回は、医療被ばくを紹介します。

医療被ばくとは、医療の場で診療や検診などを受ける人が、自身の疾病の診療目的で受ける放射線による被ばくをいいます。

医療被ばくの主なものは、次のとおりです。

- 病気に直接関連のある検査や治療（X線による診断）
- 遠隔放射線装置や密封小線源による治療
- 放射性医薬品による診断や治療
- 歯科X線による診断など
- 集団検診や定期健康診断など

放射線検査による医療被ばく値は、胸部X線CT検査で6・9ミリシーベルト、胃のX線集団検診で0・6ミリシーベルト、胸のX線集団検診で0・05ミリシーベルトです。このように検査に用いる被ばく線量は、多いもので1検査あたり数ミリシーベルトです。

そして、年間で100ミリシーベルト以下

の被ばくは疫学的に、がんなどの発症確率の上昇が認められないと報告されています。

しかし、放射線を使用する行為の判断は慎重に行わなくてはなりません。

医療行為における放射線診療の選択は、病気を発見・治療する可能性があるという利益（メリット）が被ばくという危険度（デメリット）を必ず上回るとの判断により、放射線を用いる検査を行っています。

そして、診療放射線技師は国際放射線防護委員会（ICRP）の勧告や、日本放射線技師会のガイドラインに基づき、照射範囲・撮影条件・生殖腺防護など診療放射線技師の技術と知識で被ばく線量を最小限となるように細心の注意を払い、放射線検査・放射線治療を行っています。

病院で行われる放射線を使った検査や治療は、受けられる人に必ず有益な検査であり、使用する放射線においても常に最適化して使用していますので安心して受けてください。

中学校給食

町長日記

中学校給食実施を求める請願書が議会議長宛に提出された。現在、田原本町の中学校では弁当持参が基本である。弁当を持つてこられない時にはスクールランチを頼めるようになってきている。趣旨は理解できるし、中学校給食自体を否定するものではない。私自身、中学校給食に積極的な反対でもないし、かといって積極的な賛成でもない。しかし、弁当は「子どもの好きなものに偏る」「栄養価が不足する」というのは作り手の問題だろう。食べるということは、食育という観点もあるが楽しみでもある。「冷たいお弁当を食べることになる」といつても工夫次第で冷めてもおいしい。「長時間常温で放置され食材が傷む」というが、お弁当の下に保冷剤を忍ばせれば必ず話だ。作り手の創意工夫である。

私は中学、高校と6年間弁当を持参していた。高校は学食もあったが、母の弁当の方がずっとよかった。毎日お昼の時間になるのが待ち遠しく、ふたを取るのが楽しみだった。母はそのころケーキ販売店を5店経営しその他に家業、家事にと相当忙しかったと思う。今考えても何時寝ていたのかと思うぐらいだ。だからこそ当時も今も母には深く感謝している。照れ



田原本町長 寺田典弘

くさくて感謝の言葉一つ言ったことはないが、少なくとも弁当は母と子の心をつなぐ手段の一つだ。主役は親ではなく子である。

今我が家では家内が毎日、高校2年生の息子と私の弁当をつくってくれている。息子の高校にも学食や購買があるにもかかわらず、なぜか毎日弁当である。帰っていると、おかずの文句ばかり言っている。家内もそんなことを言うのなら明日からもうつくらないと言いながら明るく日には朝早くから弁当をつくっている。

勉強、運動、睡眠までが学校に任せの昨今、食までも学校任せで良いのだろうか。中学生になれば、一人ひとり体格も違い自ずと食べる量も違ってくる。我が子の健全な成長を保障するのは親の責任ではないのか。確かに働いている方が朝から弁当を作るのは大変だと思う。しかし子達は何も言わずとも、きつと心の中でお母さんに感謝していますよ。